とあるバカの幻想拒絶

ミリライ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想を殺す右手、幻想殺し（イマジンブレイカー）の上条当麻。

幻想を拒絶する左手、幻想拒絶（イマジンリフューザー）の吉井明久。

二つの力が交錯しこの物語は始まる。

※週一更新（理想）不定期更新（現実）

目次

一話 …… 1
二話 …… 9
三話 …… 18
四話 …… 25
五話 …… 32
六話 …… 39

一話

暗い

少年は薄暗い倉庫の中にいた

痛い

少年は冷たいコンクリートの床に倒れていた。

怖い

少年は願った、これは幻想で悪い夢であってほしい、と。

「力を・・者が・・なければ・・崩壊・・」

少年の少し離れた所に立つ彼が説得するような口調で話しかけてくる。

「俺達が・・しか・・だろう・・」

しかし、意識が朦朧としている少年にその言葉は届かない。

「・・・・・」

彼は横に首を振った。

「なら・・左手・・俺様に・・」

スッと、それは彼の右肩から現れた。

「よこせ」

不完全だが絶大な力が少年に牙を剥く。

「「不幸だーっ！」」

と、叫びながら月明かりの降る『学園都市』を全力疾走するバカが二人がいた。

「おい明久まだ８人もいるぜ!?」

「まだそんなにいるの!?しつこいなこの人達！」

上条当麻と吉井明久は追いかけてくる不良の人数をちょくちょく確認しながら走り続ける。

七月十九日。

夏休み突入前日のこの日、このバカ二人は完全に浮かれていた。

だから、たまには豪華に食事すっかー！しようしよう！と、ファミレスに入り、不良に絡まれてる女の子二人を見て、まったくちょっと説教でもすっか！しようしよう！と、後先考えずに行動してしまったのだ（いつも後先考えてないだろとか言ってはいけない）。

「まさかトイレから２０人ぐらい仲間が出てくるなんてね」

「２０人で連れションとか聞いたことねーよ」

って言うか２０人もファミレスのトイレ入れるの？入れないよね

普通、と明久は心の中でツッコんでいた。
その後当然逃げた。高校生のケンカで2対２０なんてただの一方的なイジメである。このケンカに勝つには不良たちのスタミナ切れを狙い二人を追うのを諦めさせるしかない。
実は当麻の右手、明久の左手にはとある力が宿っているのだが、この状況ではまったくもって役に立たない。
「はぁはぁ・・あ、あと5人だよ当麻！」
「よ、よし！・もう少し・・・・あ」
上条当麻はマヌケな声を出して足を止めた。
明久はその理由を聞こうとしたが正面を向いてすぐに理解した。
２０メートル程先に大きな川があった。左右に距離を置いて大きな鉄橋が架かっている。その川の綺麗に舗装されている河川敷、そこには夜景でも見に来たのかカップルが大勢いた。

そして待ち伏せしている不良達も。

「・・・・・」
前に不良、後ろにも不良。
人はそれを挟み撃ちと呼ぶ。

「や、やっと・・撒いた・・かな・・？」
明久は鉄橋の中間あたりで足を止めた。いつの間にか追ってくる不良がいなくなっていたからだ。
あの後当麻とは左右に分かれて逃げることにした。どちらを追うか不良達を惑わせる為の行動だったのだがどうやら上手くいったようだ。
「疲れた・・なんか沢山カップルいて負け組感味わうし、不良と仲良く

全速力かけっこしたし、ファミレスで頼んだパエリア食べられなかったしもうなんか不幸だーっ！の一言に尽きるよ・・」

「追いかけっこの最中にバケツで転んだのも追加してね」

「ッ⁉」

周りを見渡すが誰もいない。ということは・・

「こんばんは吉井君」

「ゆ、優子さん・・」

フワフワゆっくりと空中から降りて来た彼女を明久は知っている。

名前は木下優子。さっきファミレスで絡まれてた二人の女の子のうちの一人である。ちなみに明久のクラスメイト、木下秀吉の双子の姉で外見が瓜二つなのでたまに見間違ってしまう。

「まーったく余計なことをしてくれたわね吉井君。まあ有益な情報は聞けなかったからいっか」

有益な情報？彼女は不良から何か聞き出そうとしていたのだろうか？

「それにアタシは学園都市でも九人しかいない『超能力者（レベル５）』。不良１０人程度楽勝よ？」

まあ一番下の九位だけどね、と優子は付け足した。

・・ん？１０人程度・・？

「もしかして不良が追ってこなくなったのって優子さんが」

「ご名答、吹き飛ばしておいたわよ」

「・・・・・」

あー言わんこっちゃない、と明久はため息を吐く。

「上条君を追ってたヤツらも今頃美琴の電撃で焼かれてるんじゃないかしら。・・もしかして助けたのってアッチの方だった？」

察しの良い彼女の眼差しに彼はさっと目をそらしてしまう。

そう、明久と当麻は女の子二人を助けようとした訳ではない。逆だ。不用意に彼女らに近づいた不良達を助けようとしただけである。

「ホント・・優しいわよねあなた達は」

「・・優子さんと御坂さんの攻撃受けた身としてはなんと言うか・・ね」
「そう、まーこれからも吹き飛ばすけどね」
「えぇ・・・」
この人本当に容赦ないな。風紀委員(ジャッジメント)なのに・・いや、風紀委員だからこそなのだろうか？
「それじゃあそろそろ始めましょうか？あっちも始まったらしいし」
明久が何を？と言う前に

轟音

隣の鉄橋に雷が落ちたのだと理解するのに数秒かかった。きっと向こうの鉄橋で当麻と御坂さんが対峙しているのだろう。
ふむ、どうやら戦いを始める気らしい。僕と優子さんで。
「それじゃいくわよ」
いやまてまてまてまて。
「ちょっ、ちょっと待とうか優子さん。僕は『無能力者(レベル0)』で優子さんは『超能力者(レベル5)』だよ？結果なんて分かりきってるよね？赤子とボクサーが戦うようなものだよ？」
焦りすぎて凄い早口で言ってしまった。
「結果なんて分かりきってる・・ねぇ・・」
優子はため息を吐いた。点数の悪い息子のテストをみた母親のように。

「ぷらずりーむ？」
明久は何を言ってるのかわからない、とでも言いたげに首を傾げた。
「風力使い(エアロシューター)系最高峰の能力。ｐｌａｓｍａ(プラズマ)とｓｔｒｅａｍ(ストリーム)を掛け合わせて高電離砲(プラズリーム)。　風で空気を圧縮することによってプラズマを発生させることができるんだけど」
「高電離砲(プラズリーム)」

そこで明久ははっと気付いた。先程まで穏やかに吹いていた風が強風へと変わっていることに。

まさか

「こんな感じでね」

パッと閃光が走った。目を瞑っていても七色の光が見えるほど眩しい。

そして雷のように遅れてパリパリッと何かが弾けるような音がした。

たっぷり１０秒待ってから目を開ける。

「・・・・・ッ！」

明久は自分の周りを見渡してギョッとした。アスファルトはバキバキにひび割れて高熱で少し溶けているところもあった。

「制御は難しいけど威力は絶大。そんな『超能力者（レベル５）』の攻撃を受けても『無能力者（レベル０）』のあなたは傷一つ付いていない。なんでかしらね？」

「・・・・・」

明久は優子の質問に答えるように無言で自分の左手を見る。

幻想拒絶（イマジンリフューザー）

吉井明久の左手に宿る力の名前である。

対象が『異能の力』を使うモノならば触れただけで拒絶し打ち消す能力。例えソレが神様の奇跡（システム）であっても、だ。

「美琴と一緒に学園都市の書庫（バンク）を覗いてみたけど『能力を打ち消す能力』なんて載ってなかったわよ。本当に不思議な力よ・・ねっ！」

優子は横に手を振り払った。たったそれだけで鉄骨をも貫通する風の刃が生まれ明久を襲う。

「別にそんなことないよっ！」

と、左手を目の前に掲げて風の刃を対処してから明久は言葉を続ける。
「この左手は特別な力しか消せないからケンカの時何の役にもたたないし、左手以外のところに攻撃が当たれば即死だよ？僕。」
そう、この能力の有効範囲は『左手の手首から先』だけである。
高電離砲（プラズリーム）や風の刃が体に当たれば悲鳴をあげる暇もなく黄泉の国一直線だっただろう。

まあそんな攻撃を受けてこのバカが冷静でいられるはずがなく。
『父さん、母さん、姉さん。先立つ不孝をお許しください』
とかなんとか心の中で達筆な字で遺書を書いている吉井明久である。

「それでもアタシは吉井君を倒せてない。・・戦う理由はそれで十分よね？」

ゴオオ！

と、先程よりも強い風が明久の髪を乱した。
額に汗を浮かべながら身構える。

「茶番は終わりよ」

ふふっと彼女は楽しそうに笑う。
そして彼に告げる。

まるでカレシがカノジョに今日は返さないぜ？とでも言うみたいに。

「遊びましょ？吉井君」

夕飯は食べられそうにない。

二話

『上条ちゃーん、アキちゃーん、バカだから補習でーす♪』

「……」

七月二十日、夏休み初日。

携帯電話の電子音で強制的に起こされた二人に待っていたのは担任からの連絡網（ラヴコール）だった。

「え？補習・なんで？」

『決まってるじゃないですかーアキちゃん。二人の前期の成績が直視できないぐらい酷かったからですよー』

じゃ、二人共ちゃんと学校に来てくださいねー♪と、言うとプツリと電話が切れた。

「ふ、不幸だ」

上条当麻はパタリと携帯を閉じるとバタリと布団の上に倒れ込んでしまった。

「なんか・流石だね。まあ僕も補習だけどさ」

去年の四月からこの少年と相部屋で暮らしている吉井明久だが当麻の不幸体質は物凄い。自販機で飲み物を買おうとすればお金を飲み込まれ、お金を飲み込まれなかったとしても冷えたお茶ではなく何故かアツアツのブラックコーヒーが出てきたりするのを何回も見てきた。

今朝だって優子をようやく振り切って家に帰ってきたら非常食のカップやきそばを流し台にぶちまけてキャッシュカードを踏み砕いた当麻が部屋の隅で体育座りをしていじけていた。

いやもう呪いでもかけられてるんじゃないの？と、思うほどこの少年は不幸なのである。

「ほ、ほら、いい天気だし布団干しとこうよ当麻。僕は何かご飯が作れ

ないか台所見てくるからさ」
「・・りょーかい」
布団を持ってベランダに歩いて行く当麻を確認してから台所に向かい冷蔵庫を開けるが、
「うっわ・・全滅だなーこれ・・」
昨日落ちた例の雷のせいで冷蔵庫はただの白い箱と化していた。中の焼きそばパンやカット野菜からは控えめな異臭がする。
野菜は焼いたらギリギリいけるかな？なんて考えていると、
「はぁ!?」

ベランダで当麻の叫び声がした。
まったくまた何か不幸なことが起きたのかやれやれ、と首を振って彼のもとに向う。
「どしたの？」
ギョッとしている当麻の視線の先を見る。

ベランダには白い服を着た女の子が干されていた。

「はぁ!?」
思わず先程の当麻と同じようなリアクションをしてしまう明久。
真っ白いソレは腰の辺りをベランダの手すりに押し付けて手足をだらーっと伸ばして干されていた。年は二人の一つ二つぐらい年下だろうか？長い銀髪と色白の肌を見る限り外国人のようだ。
そして何故か純白の修道服を着ておりその異様な光景を際立出せていた。
「・・明久、お前に妹っていたっけ？」
「姉はいるけど・・銀髪の妹なんていないよ。当麻は？」
「妹はおろかシスターさんなんて知り合いにすらいねーよ」
どうやら明久、当麻の妹では無いらしい。では誰なのか？というかどうやって家に入って来たのだろうか？

突如、ピクッと女の子は顔を上げた。
「っ!?」
綺麗な緑色の瞳に見つめられて思わず後ずさってしまう二人。
「お・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
続いて綺麗な唇がゆっくりと動いた。
二人は更に後ろへ後ずさる。
「おなかへった」
「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」
銀髪翠眼少女の開口一番の言葉が『おなかへった』である。理解不能な異国の言葉が出てくるのかと予想していたが発せられたのはそれはそれは流暢な日本語でした、はい。
「お腹いっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな」
ニコリと、可愛く首を傾げて彼女は笑った。
「えっと、野菜炒めしか作れなかったけど・・」
「わ!・美味しそう!・ありがとう!」
明久はただ野菜を炒めただけのソレを女の子の前の机に置いた。

なんだか凄く嬉しそうだ。
「食べる前にまずは自己紹介をしなくちゃだね。私の名前はね、インデックスって言うんだよ？」
「……偽名？」
「イギリス清教の教会の者です。バチカンの方と間違わないでね」
「……清教？……教会？」
「この国のかんじ？で書くと禁書目録。魔法名はＤｅｄｉｃａｔｕｓ５４５だね」
「……」
ぷしゅーっと二人の頭からは煙が出ていた。今、目の前で話しているのは人間ではなく宇宙人なのかもしれないとか本気で考えていた。
「それじゃ自己紹介も終わったしいただきます」
インデックスと名乗った少女はグーで握った箸で野菜をぶっ刺して食べ始めた。
（なんか凄く怪しいな・てかあの炒め物大丈夫なのか？）
（よく火を通したから大丈夫だと思うけど・・）
・・多分、と明久は心の中で小さく呟いた。
ぱくぱく
「ん！凄く美味しいよ！」
「そ、そっか。良かったー」
むぐむぐ
「少しすっぱいのって疲労回復のためにわざとそう味付けしてるんだよね？」
「すっぱい!?」
もぐもぐ
「でもすっぱいの大丈夫、美味しい！ありがとう」
「ぅ・・・うおおおぉぉぉ!!!」
男二人は腐った野菜炒めをインデックスから取り上げて貪り始めた。
最上級の笑顔で生ゴミ同然の野菜炒めを食べている彼女をただ眺めていることなんて彼らにできるはずが無かった。

上条当麻と吉井明久はソレを口に詰め込んで微笑んでいた。対してインデックスは不満げな顔でビスケット（明久の鞄に奇跡的に残っていた）をもぐもぐとかじっていた。
「えっと、その、インデックスさんとやらはなんでウチのベランダに干されていたんですかね？」
「追っ手に追われててね、本当は屋上から屋上に飛ぶつもりだったんだけど撃たれて落ちてそこに引っかかっちゃったんだよね」
明久と当麻の表情がサッと変わった。

追われていた？撃たれた？屋上から屋上に飛ぼうとしていた？この女の子が？

にわかに信じ難いことだが７階のベランダに引っかかっていたことは事実。それに今の話を微笑みながら彼女は話していた。嘘をついているようには見えない。
「撃たれたって・・全然そんな風には・・」
「それなら大丈夫、この服が守ってくれたから」
そう言ってインデックスは自分の修道服をポンポンと叩いた。もしかして防弾性があるのだろうか？修道服にそんな役割があるとは思えないが。
「もしかして警備員（アンチスキル）に追われていたのか？」
「あんちすきる？違うよ」
彼女は初めて聞いたとでも言いたげに小首を傾げた。
警備員（アンチスキル）とは学園都市の治安維持組織なのだがどうやら追っ手は違うらしい。

「魔術結社に追われてたんだよ」

「「・・・・・・・・・・」」

ひゅるるー、と気持ち良い風が部屋を通り過ぎた。

「魔術って・・はぁ・・何？魔術!?なんじゃそりゃ」
「え？あの魔術だよ？魔術（マジック）、魔術結社（マジックキャバル）」

インデックスの言葉にぽけーっと当麻と明久は顔を見合わせる。少し長い間を空けてから、

「いや、ゴメン、魔術は無理なんだよ。学園都市には色々な『超能力』があるけど魔術は無理、絶対」
「超能力ってのは信じるのに魔術は信じないの!?おかしいよ！」

明久のその言葉に彼女はドン、と机を叩きながら反論した。

「超能力ってのはクスリ打って電極貼り付ければ誰だって『開発』できちまうんだぜ？一切合切が科学で説明できるんだから信じて当然だろ？んで魔術ってのは何なんだよ。原理を説明できるのか？ってか見せてくれよその魔術ってヤツをよ」
「魔力がないから私には使えないよ？」
「・・・・・・」

カメラあると超能力使えないわーとかほざいてるダメ能力者かこの子は。

「な、何その私を小馬鹿にするような目は！魔術は使えなくても私には十万三千冊の魔道書があるんだからね？」
「十万三千冊のまどうしょ？持ってるようには見えないけど・・」

じーっと二人はインデックスを観察するが約十万冊の本を所持しているようには見えない。図書館のカギを持っているとかそういうオチだろうか？

「ちゃんとあるよ、ここに」

トントンと、彼女は自分の頭を人差し指でつついた。

「頭？・・記憶にあるって言いたいのか？」

「そう言うことなんだよ」
「・・・・・」
いや、胡散臭すぎるだろ。
「うー、さっきから何なのあなた達は！大体超能力だなんて言って君達には一体何ができるって言うの？」
「あー、うーん、そうだなぁ」
上条当麻は少し考えてから、
「俺の右手には幻想殺し（イマジンブレイカー）、隣の明久の左手には幻想拒絶（イマジンリフューザー）って力が宿ってるんだけど」
「ふんふん」
「その手で触ると・・それが異能の力なら超電磁砲（レールガン）だろうが神様の奇跡（システム）だろうが問答無用で打ち消せます、はい」
「・・・・・」

沈黙。

「ぷぷぷぷぷ」
「・・なんだそのわざとらしい笑い声はオイ」
「いやだって神様の名前も知らない人に神様の奇跡打ち消せますって言われてもなー」
ぷぷぷぷぷ、と口を押さえて笑うインデックス。
「くっそ・・ムカつく。こんなインチキ魔法少女に小馬鹿にされたことがこんなにムカつくとは・・」
「インチキ魔法少女!?インチキじゃないもん魔術はあるもん！」
「だったら早く見せてくれよ！ソレを俺の右手か明久の左手でぶち壊せば俺らのこと信じるしかねーだろ」
売り言葉に買い言葉とはこのようなことを言うのかなーと、明久はちょっと遠目から二人を見て考えていた。
「いいよ！そんなに言うなら見せてあげるよ!!これ、この服は『歩く教会』っていう最強とも言われる防御結界なんだからねっ！」
彼女は立ち上がりくるりと一回りして『歩く教会』を見せつけた。

「試しに包丁でもお腹に突き刺してみてよ！私は無傷だからっ！」
「んじゃあ一丁包丁でも刺してみるかーってやるわけねーだろ！明日の朝刊の一面を逮捕された俺の顔で飾りとぉ無いわ！嘘つくならもっとマシな嘘付きやがれってんだ！」
「むきー！嘘じゃ無いもん！この分からず屋！ちくちく頭！」
「ちょ、ちょっと二人共落ち着いて」
明久が二人の間に入って仲介しようとするがここまでくると止まらない。
「その服が本当に『異能の力』ってんなら俺の右手が触れただけで木っ端微塵って、ことだよなァオイ」
「え、いやいや、当麻それはやめた方が」
「君の力がほ、ん、と、う、な、ら、ね？ふっふーんだ！」
上等だゴラァやってやんよ！と、明久が止める暇も無く当麻はインデックスの肩を掴んだ。

……

しかし何も起きない

「……あれ？」

ぽんぽんと何回か肩を叩いてみるがが本当に何も起きない。

「別に何も起きないけど？」

ふっふっふ、という感じで両手を腰に当て威張るインデックス。

次の瞬間、するりとインデックスの服が落ちた。

床に落ちた修道服は糸が綺麗に解けてただの布と化していた。
ただ、帽子のようなフードは服から独立していたからか無事だった。

状況を理解して凍りつく少女と少年二人。

数秒後、夏の暑さを吹き飛ばすような悲鳴が第七学区に轟いた。

三話

どうやらインデックスは怒ると人に噛み付く癖があるらしい。
「いってぇ・・あちこち噛み付きやがって・・」
「なんで僕まで噛まれたんだろ・・」
当麻は噛まれたところに絆創膏を貼る作業を、明久はただの布地になってしまった修道服を針と糸で縫い直していた。
「・・・・・」
インデックスはと言うと体に毛布を巻いて部屋の隅で体育座りをしていた。なんか凄いデジャヴだなーとか思いながら明久はチクチクと修道服を縫っていく。
(ねぇちょっと当麻、謝りなよ)
(まぁ・・大人げ無かったよな・・俺)
後先考えずにやりすぎたよな、と呟いて当麻はぽりぽりと頭をかいた。
「あー、あの、インデックスさん」
「・・・・・」
「いや、その、本当に申し訳」
「っ!」
当麻が謝罪の言葉を最後まで言い終える前に目覚まし時計が飛んできた。
うわっ!?と2人が叫ぶと同時に巨大な枕やラジカセなど様々なモノが立て続けに襲ってくる。
「あぁ!?俺のゲーム機が!?」
「あぁ!?優子さんから貰った絶賛急上昇中ミュージシャンのCDが!?落ち着いてインデックス!」
「あれだけの事があったのになんで普通に話しかけられるのっ!?」
「「す、すんませんでしたーっ!」」
当麻と明久は地面に頭を擦り付けて彼女に全力の土下座をする。

「ほ、ほらできた！・修道服縫っておいたから！・着てみてよ！」
「・・・・・む」
　インデックスはむっとした表情で明久から修道服（修復済み）を受けると毛布の中で着替え始めた。
「なんか・・その着替え見るとプールの授業思い出すよなぁ」
「あー確かにね」
「・・・・・」
　インデックスが何見てんだよ？とでも言いたげに少し二人を見たが気にせずに着替えを続ける。
　頭のフードがぽとんと落ちたが着替えに集中しているせいか全然気付いていない。
「ん？・もうこんな時間!?・補習行かないと！・」
「うっわ！・完全に忘れてた！・」
　授業、と言う単語で『夏休みの補習』を思い出した二人はバタバタと学校に行く準備を始めた。
「明久、俺の財布知らねーか？」
「えーっと確か玄関に落ちてあったような気が」
「そうか、サンキュー」
　当麻は財布を取りに玄関に向かうが、

　ガツン

「ぐおっ！・ぐおぉぉぉっ!!」

　テーブルの脚に小指をぶつけて悶える超絶不幸男上条当麻。
　更に彼はバランスを崩して、

　バキッ

「・・・・・あ」

布団を干すため、テーブルの上に避難させて置いた携帯の液晶画面を粉々に砕いた。
うわぁ、とそれを見てつい顔をしかめる明久。
「ち、ちくしょう・・不幸だ・・」
「もしかしたらその幻想殺し(イマジンブレイカー)が原因かも」
修道服を着終えたインデックスがくすくす笑いながらそう言った。
「当麻の右手が?」
「うん、神様の加護とか運命の赤い糸とか全部まとめて消しちゃってるのかもしれないね。その右手で」
「なるほど、確かにあり得るかもなー」
オカルト的な話なのに何故かとても説得力がある。
「あ、あのー明久さん?そんなオカルト的なことを信じるんでせうか?」
「え、いやだって当麻の不幸ってオカルトレベルで凄いじゃん」
「・・・・・」
全くその通りのことを言われて反論できず無言でずーんとうつむく当麻。
「でも僕だって似たような力を持ってるけど当麻ほど不幸だーってならないよ?」
「うーん」
インデックスは腕を抱えて少し考えてから、
「幻想殺し(イマジンブレイカー)と幻想拒絶(イマジンリフューザー)は力の働き方が違うのかもしれないね。殺しと拒絶は全然違うし」
「うーん?なる・・ほど?」
「全然分かってないって顔してるな明久」
そう言われて彼はあははーと苦笑いをした。
「それか幻想殺しの力が強すぎて不幸なことが全部そっちに集まってるって言うのも考えられるかな」
「・・・・・?」
それは明久が本来受ける不幸なことも全部当麻に降り注いでるってことなのだろうか?

「‥当麻」
「‥なんだ？」
「‥今度牛丼大盛りで奢ってあげるね」
「‥おう」
　二人の間には何とも言えない気不味い雰囲気が漂っていた。
「それじゃあ私はそろそろ行くね」
「ん？行く宛でもあるのか？まだウチに隠れてた方がいいんじゃねーの？」
　突然立ち上がった彼女に当麻はそう提案する。
「ここにいると敵が来ちゃうから。あなた達を巻き込む訳にはいかないよ」
「それじゃあ尚更放って置けないよ。『歩く教会』だっけ？それも壊れちゃったしもし外で追手に襲われたら」
「それじゃあ」
　明久の言葉をインデックスが遮った。
　彼女は続けて、

「‥それじゃあ、私と一緒に地獄の底までついて来る？」

　満遍の笑みで、
　でも少し辛そうに、
　彼女は笑っていた。

『こっちに来ないで』

　二人はそう言われた気がした。

「それに大丈夫！ここに行ってみるから！」
　インデックスは手に持ったチラシをこちらに見せてそう言った。

「あ、それ何日か前に僕が道端で貰った宗教勧誘のチラシ」
「んー？『教会でお祈りを』か。そこに行けば助けてもらえるのか？」
「たぶん、ね。英国式じゃなかったら門前払いだけどその時は他の教会を探すから」
「「……」」

もしかして、と二人は考える。
ここで行き倒れる前にいろんな教会を巡っていたのではないか。
その度に門前払いされてどんな気持ちで逃げ続けていたのだろうか、と。

「・なんか困った事があったらまた来いよ」
「次こそは何か美味しいもの作ってあげるからさ！」

それなのに二人はそんな事しか言えなかった。
神様を殺せる右手、神様を拒絶できる左手を持つくせに。
たった一人の女の子も救えない。
「うん、お腹減ったらまた来るから。じゃあね！」
そう笑って、玄関のドアを開けて彼女は出て行った。
「なんか不思議な奴だったな・」
「そうだね・ってあの子フード忘れてる！」
明久は右手でフードを掴んで外に出るが、
「あー・もう行っちゃったか」
「まぁまた来るんじゃねーの？そのフード取りにな」
「そうだね・また会えるよね！」
「おう」
そう言って二人の少年は笑う。
その時はパエリアでもご馳走してあげようと明久は心に誓った。

ガチャリ

と、お隣さんのドアが開いた。

「何やってるにゃーカミやんにアキちゃん？」

「制服着てるってことはお前らも補習か？」

隣の部屋から出て来たのは制服を着崩した赤髪と金髪の男二人。

「おはよー雄二、土御門」

「お前らもってことはそっちも小萌先生から電話がかかって来た口か？」

「そう言うことだ。まさか夏休み初日から補習だとはな・・」

「まぁ一学期サボった分チャラになると思えば楽だぜい」

確かに明久も当麻も学校をサボりがちだった。

いや、度重なる不幸でやむを得なく休んでしまったと言った方がいいか。決して意図してサボった訳では無い。

「ところでその右手のフードは・・」

雄二が指差したその先にはインデックスが忘れたフードが。

「え？あぁこれは」

「アキちゃんもついにシスターのコスプレをっ！今日の夜はムッツリーニを呼んで撮影会だにゃーーー!!!」

実はこの吉井明久、女装がかなり似合う。

一年生の時の学園祭で女装したのが全ての始まりでムッツリーニこと土屋康太によれば『・・メイドアキちゃんのブロマイドは飛ぶように売れた・・』らしい。

ちなみに明久の中でこのことは完全に黒歴史と化している。

「シスターのコスプレ!?いや違うよこれは」

「まぁいいんじゃないかそんな趣味があっても。この世にはいろんな人間がいるからな」

「暖かく微笑みながら肩叩くのやめてくれない雄二!?ちょっと当麻言ってやってよ！」

全ての成り行きを知っている当麻に話を振るが、

「『朝起きたらシスターさんがベランダに干されててそのフードはその女の子が忘れたモノ』って言ったら信じる奴いると思うか？」

「ふ、不幸だぁーーーー!!!」

結局、上条当麻に劣らず吉井明久は不幸なのであった。

四話

「・・おはよう」
「っ!?む、ムッツリーニか、ビックリした・・」
たわいも無い話をしながら登校していると急に後ろから挨拶された。
「僕もいるで。おはようなんやで～」
さらにムッツリーニの後ろから青髪にピアスをした少年が歩いてきた。
「なんだ、青髪変態コンビも補習なのか」
「ちょっ！誰が変態やって!?」
「・・不名誉な・・！」

どんなジャンルでも大好物、雑食男青髪ピアス。
寡黙なる性識者（ムッツリーニ）の異名を持つ土屋康太。
この二人は学校で青髪変態コンビと呼ばれており生徒（特に女子）から恐れられてたりする。

「つーか土屋から全然気配を感じなかったんだが」
「だよね、いつの間にか背後にいたし・・」
「・・強能力者（レベル3）に上がった」
マジかよ!?と、当麻と明久は驚愕する。
「一年で2つもレベルが上がるだなんて前代未聞だぜい」
「視覚阻害（ダミーチェック）だっけか、気配消せて監視カメラにも映らなくなると手がつけられない能力になるな」
「その能力使って変なことしちゃダメだよムッツリーニ？」
「・・・・・」
明久のその言葉で何故か変態二人は目をそらした。

「・・大丈夫」
「いいか？アキちゃん」
　珍しく真面目な顔でそう言って、
「「バレなけりゃ問題無い」」
「「問題しかねーよ！」」
　この二人が新聞の一面を飾るのもそう遠くないのかもしれない。

「うー疲れた・・」
「島田も苦労が絶えないのぉ」
「おはよー、美波はどしたのそんなダラーっとして」
　学校に着いた明久はまず窓側後方の机に荷物を置いた。
　そして真ん中らへんの机に座っている男勝りな性格で発火能力者（パイロキネシスト）の島田美波、爺言葉を使う読心能力者（サイコメトラー）の木下秀吉（超絶可愛い、だが男）に近づく。
「おはようなのじゃ明久」
「おはよアキ、ちょっと登校途中に美春に追われてね・・」
「清水さんにかー、確か昨日も追っかけられてたよね？」
　昨日の放課後に二人が校舎で仲良く鬼ごっこしていたのを見た気がする。
「そうそう、夏休みだしプールに行こうって誘われたけど補習があるからって断ってきた。去年の事もあるし」
「去年というと・・確かプールで色んなことを」
「やめて木下、思い出したくない」
「む、すまぬ・・」

「大変だね美波も・・」
　清水美春とは島田美波を愛してやまない少女(ストーカー)である。能力が同じ発火能力(パイロキネシス)なこともあって(一方的に)仲良くなったらしい。
「そういえば明久よ、姉上から聞いたのじゃが昨日は大丈夫だったかの？」
「ん？あぁ優子さんのこと？」
　秀吉の言葉で昨日の夜にあったことを思い出す。
　いくら左手で消しても襲ってくる風の刃、眩しい閃光を放つ高電離砲(プラズリーム)、などなど。
「・・まぁ・・うん・・大丈夫・・」
「姉上はちと強引なところがあるからの、姉上に代わって謝るのじゃ」
　別に秀吉が謝る必要ないよ、と笑いながら明久はぽりぽりと頬をかいた。
「ふーん、木下のお姉さんとデートねぇ」
「え、いやデートとかじゃなくて」
「・・昨日ホントはウチと約束あったのに・・」
「・・あー」
　頬杖をついてむーっとする美波。
　確かに昨日は映画を見に行く約束をしていたが美波は清水に、明久はその情報を聞きつけたＦＦＦ団に追われて結局行けなかった。
　ちなみにＦＦＦ団とはまたの名を異端審問会と言い異性に縁のある者を物理的に裁く断罪集団である。
「その、ちゃんと埋め合わせするから」
「じゃあその・・今度プールに・・約束・・」
　チラチラと明久を見ながら小声で呟く彼女。
「オッケー、約束ね」
「ホント？絶対だからねアキ！」
「わ、分かったから」
「良かったのぉ島田よ」
「～♪」
　明久の二つ返事で機嫌が良くなる美波を見てホッと胸を撫で下ろ

す。
　彼女は早速携帯を起動させてどこのプールに行くか調べ始めた。
「うーん沢山あって悩むわねこれ」
「最近できたレジャーランドなんかはどうかな？いろんな種類のウォータースライダーがあってみんなで楽しめると思うよ」
「・・・・・・みんな？」
　あれ？と首を傾げる二人。
「いやー当麻達も映画楽しみにしてたからさ。秀吉は演劇部の方が忙しそうだったから誘わなかったけど今度は行けそうじゃない？」
「・・・・・・」

　そこで二人は思い出した。
　この少年が絶望的に鈍感だと言うことに。

「映画、皆で見る予定だったのかの・・？」
「うん、そうだけど」
「・・明久よ・・お主と言う奴は・・」
「？」
　先程の二人と同じように首を傾げる明久。
「・・・・・・」
　突然、美波は無言で彼の手をガシッと掴んだ。
「どしたの美波？どうして僕の手を掴んでって痛い痛い痛いっ！指がおかしな方向にっ!?」
「アキのっ・・アキのバカっ！」
「僕なんかした!?ちょっとストップ美波っ！」
「〜っ!!」
　どうやら明久は美波が怒っている理由が分からないらしい。
　そんな彼に彼女は問う。
「ねぇアキ、関節外すのと根性焼きどっちが良い？」
「関節外されるならまだしも能力で根性焼きはヤバイって！」
「それじゃあ根性焼きね☆」

「いやぁーーー!!!」
「関節外されるのは別にいいんじゃな・・」

一方、窓側前方の席では、
「にゃーっ!何故わからない!やっぱり一番はメイドさんなんだぜい!妹だったら尚良し!!」
「何をゆーとるんや!僕はロリのちっささに可能性を感じてるんや!」
「・・ボクっ娘を愚弄する者には死を」
どのジャンルが一番かを決めるしょうもない争いが。

さらに、後方のロッカー前では、
「ちょっと待て!誤解だ!」
「誤解?それじゃあこの写真に写っているのは誰だ?霧島翔子と・・坂本雄二、お前だ。夏休み前日から早速デートとは面白いことをしてくれたな」
「だからデートじゃねぇって言ってるだろうが!」
「デートじゃないにしても大罪だ。諦めて報いを受けよ」
「くっ!畜生!」
「逃すな、捉えて十字架に吊るせ」
「「ＹＥＳ」」
「は、はなせっ!」
雄二がＦＦ（ヤバイ宗教）団に絡まれていた。

「はーい補習を始めるですよーって何ですかこの殺伐とした空間はー!?」
そこに身長１３５ｃｍ、ランドセルが似合いそうな教師ナンバーワン（文月高校学内アンケート参照）の月詠小萌先生が入ってきた。
状況をしっかり確認してからこの教室を浄化すべくあわあわと動き出す。

「何回目だろうな、この光景を見るのは・・」
そして様々な厄災から逃れる為、前方のドア近くに避難していた上条当麻はやれやれとため息を吐いた。

こうして夏休みにもかかわらず文月高校二年Ｆクラスの騒がしい一日は始まる。

「うぐぐ・・」
と、呻きながら美波に関節技をキメられた身体を伸ばして窓の外をぼーっと眺める。

インデックスは今どうしているだろうか？ちゃんと教会を見つけられただろうか？もしかしてまたお腹が空いて倒れているんじゃ無いだろうか？

さっきから明久は彼女のことを考えていた。
クソ暑い教室、何の話をしているのかサッパリ分からない授業、痛む身体。こんな事になるぐらいなら追いかけてでもあのフードを少女に渡しに行けばよかったなぁと後悔する。
「・・・・・あ」
今になって彼は気づいた。
なんだかんだで彼女との繋がりが欲しかったという事に。
彼女が「おなかすいた」と笑いながらまた家に来てくれることを無意識に期待してしまっていた。

『・・それじゃあ、私と一緒に地獄の底までついて来る？』

そんな優しい言葉で辛そうに笑っていたのを思い出す。
明久と当麻を危険な世界から突き放すために彼女は助けを拒んだ。
それなのに自分はどうだ？ただ彼女の笑顔が見たい、あの子の存在が幻じゃないのだと信じたいが為に再会したいと望んでしまっている。
「……」
明久は静かに首を振り授業に集中する事にした。
今考えたことを早く忘れようとするために。

五話

合格者
アキちゃん、７１点
坂本ちゃん、９６点

「「うそだあああぁぁぁっ！」」

時間は昼休み直前の午前１２時、小萌先生が黒板に書いた文字を見て絶叫するＦクラスの面々。
「ちょっと俺は調べることがあるんでな、先に失礼するぞ」
合格者の一人、坂本雄二は当然とでも言いたげに笑った。
そしてもう一人の合格者、吉井明久は、
「ふっ、僕が本気を出せばこれぐらいは」
「坂本はともかく明久が合格とか納得できませんよ先生！」
「そうやで小萌先生！こんなん地球が滅びたとしてもありえへんで！」
「・・どんな手を使った明久？」
「アキが合格？明日の天気は大雨・・いえ嵐ね・・」
「・・ねぇ？みんな酷くない？」
雄二も合格したはずなのにこの扱いである。
「んー、ですが１００問テストの７０問が正解だったら今日は帰って良し！と言ったのは先生ですし・・アキちゃんはちゃんと勉強していたみたいなので合格なのです！」
「「畜生ッ！」」
壁や床を叩くクラスメイト達。それを見て明久はそこまで悔しいのか、と思わず呟いてしまった。
「と言うわけで午前中の補習はここまでにするのですー。お昼ご飯ちゃんと食べるのですよー？」

ガラガラと教室のドアを閉めて小萌先生は教室を去った。
その数秒後、
「さて明久、どんな手を使ったんだ？白状しろ」
雄二のその言葉で明久の尋問が始まった。
「簡単なことだよ、僕はこれを使ったんだ」
ゴソゴソと筆箱を漁ってソレを取り出す。
「ｓｔｒｉｋｅｒΣ５！（ストライカーシグマファイブ）」
カッコ良さそうな名前を叫ぶと共に掲げたのは一本の鉛筆。
「「……」」
しーん、と静まり返る教室。
「・ワシには何の変哲もないただの八角形の鉛筆にしか見えないのじゃが」
「ほらここ見てよ秀吉、鉛筆の上の部分にちゃんと数字が書いてあるでしょ？」
よく見ると八角形それぞれの面に１、２、３、４と細字の油性ペンで書いてある。
「これをこうして」
カラコロ、と鉛筆を転がして、
「出た数が答え！正答率驚異の７０％超え！それがｓｔｒｉｋｅｒΣ５なんだ!!」
デデーンと効果音がつきそうなポーズでソレを見せつける明久。
「はぁ、なんだそう言うことか」
「まぁ明久はなかなか運が良いからなぁ」
「そんなことだろうと思ったわよ」
「アホくせぇ」

「・・明久はほっておいて早くご飯」
　それを見て足早に教室を出て行くクラスメイト達。
「ええ!?ちょっと待ってよまだｓｔｒｉｋｅｒΣ４（ストライカーシグマフォース）の話が」
「「うるさい黙れ」」
「酷い！さっきまであんな興味津々に見てくれてたのにっ！」
　ガクッと明久は机にうなだれる。
ｓｔｒｉｋｅｒΣ４（ストライカーシグマフォース）を改良するのにどれだけの苦労があったのか話すのはまた別の機会になりそうだ。

「明久よ、少し頼みごとがあるのじゃが」
「ん、秀吉？どうしたの？」
　ズーンと凹んでいる明久に声をかけたのは木下秀吉、やはりいつ見ても可愛い。
「まずはこれを見て欲しいのじゃ」
　と、彼女・・じゃなくて彼が差し出したのは携帯電話。画面には一通のメールが映し出されている。

『親愛なる我が弟へ
　今日の一時ぐらいに「ラ・ペディス」でケーキセットの予約してあるから受け取って１７７支部に届けてくれない？アタシは幻想御手（レベルアッパー）の件で動いてて行けなさそうだから、お願いね？

　お姉ちゃんの言うこと聞けるわよね？』

「怖っ！最後の文がなんか怖いよ優子さん！」
　お願いというより強制しているような気がする。

「ワシは不合格じゃったから行けなさそうなのじゃ、そこで姉上と面識のあるお主に頼みたいのじゃが・・」
「うん、いいよ。僕に任せといて」
確かに明久は「ラ・ペディス」や「１７７支部」の場所を知っているので適任だろう。１７７支部の風紀委員達(ジャッジメント)とも顔見知りだ。
それにここで秀吉に貸しを作るのは悪くない。今度メイド服を着てくれとお願いして
「む？明久よ、何かやましいことを考えておらぬか？」
「はっはっはっそんなこと考えてる訳ないじゃないか秀吉」
「むぅ、気のせいだったかの？」
流石は読心能力者(サイコメトラー)。低能力者(レベル１)で何を考えているかまでは分からなくともなかなか鋭い所を突いてくる。
誤魔化すために視線を携帯に向けているととある単語が頭に引っかかった。
「ん？そういえば幻想御手(レベルアッパー)って確かあの爆破事件で聞いたような・・『
「知っておるのかの？最近姉上はその事件で忙しいらしくてのぉ」
夏休みに入る数日前だっただろうか、とある事件に遭遇してしまい幻想御手の話を優子から少し聞いたことがある。
「まぁ色々あってね・・ともかくちゃんと優子さんに届けて」
「その話詳しく聞かせてもらおうか」
「!?」
後ろを振り向くといつの間にかＦＦＦ団会長の須川亮が黒装束を着て立っていた。さらにその後ろには部下達が列をなして並んでいる。
「優子さん、というと木下のお姉さんか。罪状は如何なるものか」
「会長、勿論火炙りの刑ですよね？」
「ぬるいな、釘バットの刑が妥当だろ」
「いやここは電撃使い(エレクトロマスター)の俺がビリビリに」
「横溝お前の静電気じゃ何もできないだろ。やはり俺の空力使い(エアロハンド)で」
「扇風機（弱）並みの風でどうするつもりだ福村？」
さすがＦＦＦ団、もう既に処刑方法について会議を行なっている。

「全員で一回ずつバックドロップってのはどうだ？」
「久しぶりに頭下屋上落としでもいいんじゃね」
「・様々な意見が挙げられているな。いっそのこと全部やるか」
「「それだ!!!」」
「いやそれだじゃないよ！・僕は秀吉のお願いを聞いてるだけだよ、別にやましいことなんて全然ないって！」
　手をブンブン振って必死に否定する。ここで弁明しなければ待っているのは死、のみだ。
「ふむ、確かに木下秀吉のお願いだったら仕方ないのかもしれないな。可愛い女子の願いを叶えようとする吉井の行動は間違っていない」
「ワシは男なのじゃが・・」
　一日に一回は言っているセリフを秀吉はため息とともに吐いた。
「よし、罪は軽くするべきだと判断した。それを踏まえて吉井の罪状は」
　明久は左胸をさすって安堵する。この感じだと全員からビンタ1発程度で

「半殺しの刑」
「さらばだっ！」
「絶対に逃すな、地の果てまで追え」
「「コロス」」
　明久は用意していたカバンを掴んで廊下に出ると全速力で廊下を走り一階の下駄箱を目指す。
「吉井止まれヤァ！」

「ヒャッハァー！血祭りダァ！」
「捕まえたらまずは火炙りの刑だゼェ！」
「君達須川君の話聞いてた!?半殺しだよね!?」
もうどう見ても半殺しじゃなくて完全に殺しに来ているのですが。
「「関係ねぇ裏切り者には死を！」」
「このひとでなしっ！」
とりあえず手に持っている刃物や釘バットを収めて欲しいものである。
校舎端の階段の手すりを慣れた手つきでまたいで出来るだけ追っ手との距離を離す。すると廊下の先に下駄箱が見えてきたが、
「廊下は走るなと何回言えば分かるんだお前達は！」
「「鉄人!?」」

明久達の目の前に大柄な男が立ち塞がった。
趣味はトライアスロン、規律を乱す者には鉄拳制裁でお馴染みの西村宗一こと鉄人である。
噂ではとある超能力者（レベル5）と素手で互角にやりやったことがあるらしい。マジモンのバケモノである。
「鉄人と呼ぶな、西村先生と呼べ！貴様らはこれから補習室送りだ！昼休み中たっぷり指導してやろう」

補習室。
入れば「趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎」と理想的な生徒に教育（洗脳）されるという文月高校で恐れられている教室の名。
「観念して補習室に来い！」
「「逃げろおぉ!!!」」
昨日今日で不良（スキルアウト）、超能力者（レベル5）、ＦＦＦ団（ヤバイ宗教）に追われ、しまいには鉄人（補習教師）と鬼ごっこ。

明久は背後から追ってくる鉄人を尻目に全速力で走り出した。

六話

晴れた青空の下、建物の木陰で明久は息を整えていた。
「流石にここまでくれば大丈夫かな・惜しい人達を亡くしたな」
鉄人を振り切って学校の外に出るのに何人のＦＦＦ団員を犠牲にしただろうか？悲鳴をあげながら補習室に連行される団員達を思い出す。
「・・南無阿弥陀仏」
彼は決して彼等の尊い犠牲を忘れないだろう。
２分ぐらいは。

カランカラン♪
「いらっしゃいま・・って何しに来たんですか豚野郎っ！」
「あのね清水さん、一応僕お客さんだよ？初手罵倒ってのもどうかと思うんだけど」
ラ・ペディスに入るなり罵倒してきた店員は昨日今朝と美波を追い回していた張本人の清水美春。メイド服を着ているということは今はこのお店を切り盛りする両親の手伝いをしているのだろう。
「美波お姉様に近づく豚野郎をお客さんと同等に扱うなど美春にはできません！」
ふん、と金髪の縦ロールを揺らしてそっぽを向く清水。
やっぱりこうなるのか、とため息を吐きながら明久は左手で頭を掻く。この様子じゃあ事情を話しても信じてもらえるかどうか怪しい。
「と、言いたいところなのですが木下さんから事情は聞いているのでこれを豚野郎に仕方なく差し出します」
明久が頭を悩ませていると先に清水が動いた。

不機嫌そうな顔で彼女がショーウィンドウから取り出したのは店名が綺麗に飾られた大きめの白い箱。きっと中には様々な種類のケーキが入っているのだろう。
「あー、秀吉も優子さんもちゃんと連絡してくれてたのかな？」
「弟の代わりに豚野郎が取りに来ると木下さんから電話を頂きました。いつもお世話になっている木下さんのお願いなので仕方なく！し、か、た、な、く、ですからね！」
「あ、ありがとう」
　睨みつけてくる彼女からなかなか重量のあるソレを受け取る。
「それに今度木下さんや御坂さんと遊ぶ約束を取り付けることができましたし・・そこに美波お姉様も呼んで・・白井さんと協力してあんな服やこんな服を・・ぐへへへ・・」
「・・・・・」

　なんだかこの子は超えてはいけない一線を大きく超えているような気がする。白井さんの影響もあってか最近は行動力が物凄い。
「・・む、何ですか豚野郎、怪訝な目でこちらを見て？気持ち悪いです」
「別に何でも、ってそう言えばメイド服のデザイン変わったのかな？」
　前に美波と来た時は結構派手なメイド服だったが今回のメイド服は落ち着いた感じのデザインをしている。
「豚野郎のくせによくぞ気づきましたね！実はこのメイド服、美春が製作したものなのです！この清楚で上品なデザインはお姉様や木下さんに・・ではなくてこのお店にピッタリですの」
「下心が丸見えだよ清水さん・・でもまぁ」
　明久は清水の着ているメイド服をもう一度よく見てから、
「小さいハートの刺繍が僕的にポイント高いかな、清楚なデザインの中に可愛さもあってなかなか似合ってるよ」
「・・・・・」
「・・清水さん？」

明久の言葉に少し驚いてから黙ってしまう彼女。
「・・豚野郎にしては珍しく的確な評価ですね、褒め称えましょう」
「あはは・・それはどうも」
明久が清水に褒められる（？）のは凄くレアな体験だ。というか初めてかもしれない。
「そういえばその箱の中にはアイスケーキも入っているので早く行かないと溶けてしまいますよ？」
「え？・それじゃ早く１７７支部に届かないと！・じゃあね清水さん」
溶けたまま持って行って優子が激怒したら流石にヤバい、最悪の場合昨日の続きをすることになる可能性もあり得る、と考えながら明久は急いでラ・ペディスを後にする。
「あまり走るとケーキが・・って聞いてませんわね。それにここから１７７支部は道がかなり複雑なのですが・・」
明久の出て行った扉を見ながらやれやれと清水は首を振る。
「・・・・・」
そして彼女は自分の作ったメイド服を無言でチラリと見てから、
「・・これだから豚野郎は」

ほんの少しだけ笑った。

「・・ココ・・ドコ・・？」
明久の周りには見たことがあるような、ないような景色が広がっていた。案の定、迷子である。
「急いでたし曲がるとこ一つ間違えたかもなぁ」
とりあえずそこら辺の人に道でも聞いてみるか、と喋り掛けやすそうな歩行者を探していると、
「・・吉井？・何してるの？」

「あ、霧島さん」
優子と同じ制服を着た霧島翔子に後ろから話しかけられた。髪を抑えながら首を傾げる彼女を見て今日も綺麗だなーとか考えながら言葉を続ける。
「実は１７７支部に行きたいんだけど道が分からなくなっちゃって・・」
「・・私もそこの近くに用事があるから案内してあげる」
「ホント？助かるよ霧島さん」
彼女の案内なら安心して着いて行っても大丈夫だろう。
こっち、と霧島が指を差した方向に二人は歩き始めた。
「そういえば夏休みだし霧島さんは私服とか着たりしないの？」
「・・常盤台学園の中等部と高等部は外出時制服の着用が義務づけられているから」
「うわ・・大変そうだねそれ」
年がら年中外出する時は制服を着てないといけないなんて自分だったら骨が折れそうだ。
「・・吉井は補習があったから制服？」
「うん、そうだけどよく分かったね」
「・・雄二も今日補習があるって言ってたから」
そういえばと、雄二と霧島は幼馴染で仲が良かったことを明久は思い出す。まったくこんな美人さんと幼馴染なんて羨ましすぎる。
「・・って直射日光が凄いな、溶けてないかなケーキ」
左手に持った白い箱を見て明久は呟く。
冷凍保存剤が入っているとはいえこの暑さは流石にマズいんじゃないだろうか？携帯で気温を見ると３０度を超えている。
「・・私の能力で冷やしてあげる」
「ん？霧島さんの能力って確か・・」
「・・絶対零度（ニブルヘイム）」
「えっと・・いろんな力を低下させる能力だったっけ？」
超能力者（レベル５）、第５位の彼女が所持する能力は「防御面だけ見れば第１位と同等の力があるのです！」と小萌先生の授業で聞いた気がする。銃

弾、超能力、終いには核爆弾すらも無効化するらしい。
「‥うん、正確にはベクトルを低下させてる。私の半径１０ｍ以内にいればそのケーキは冷たいままだから安心して」
「ありがとう、やっぱり霧島さんは優しいね」
　彼女と会うたびにこうやって毎回助けて貰っているような気がする。感謝しても感謝しきれない。
「‥いつも雄二がお世話になってるから。特に去年の一端覧祭の時は私も雄二も助かった」
「あー大変だったねあの時は‥ってよく覚えてるね霧島さん」
「‥記憶力には自信があるから」
　彼女は少し胸を張ってそう言った。控えめに言って凄く可愛い。
「‥雄二は素直じゃないから、その代わりに私が吉井に感謝しないと」
「あはは、その言葉を聞くたびに雄二のお嫁さんみたいだなぁって思っちゃうよ」
「‥お嫁‥さん‥」
「‥霧島さん？」
　霧島は小さな声でそう呟いて足を止めてしまった。
「‥家は一戸建てで‥雄二の監禁部屋を作って‥子供の名前は男の子ならしょうゆ、女の子ならこしょう‥ふふふ‥」
「いろいろとツッコミたい所はあるけどお子さんの名前は変えた方がいいんじゃないかなぁ‥」
　どちらも調味料を連想してしまう名前だ。流石に生まれた子供が不憫すぎる気がする。
「‥着いた」
「何日ぶりだっけなーここに来るの」
　雄二と霧島の名前を組み合わせて良い名前を考えていたらいつのまにか１７７支部前に着いていた。
「‥それじゃ私はこっちだから」
「本当にありがとね霧島さん、またね！」
「‥うん」
　笑って頷くと霧島は背を向けて去っていく。

「よしっと」
その姿を見送ってから明久は１７７支部へと歩を進めた。

「んで次の標的はアイツらか」
『神を殺す右手、神を拒絶する左手、面白そうな力なのよね』

明久と霧島が別れたすぐ側の裏路地。
そこで少年が電源の入っていない携帯を耳に当てて話していた。
「・・ったく、とうとう能力者（こっちの人間）にもアレを送りつけるのかアンタは」
『遅かれ早かれそのつもりだったのよ。そっちのお偉いさんは何を考えているのかさっぱりだし』
「はっ、それはこっちのセリフだな。まぁ俺のやることは変わらんが」

少年は適当に言葉を返してから腕時計を確認する。
「・・俺はこの後用事があるからそろそろ切るぞ」
『アツアツなことなのね、ひゅーひゅー』
「一つ忠告しておくがな」

青筋を浮かべギリギリと手で携帯を軋ませて赤髪の少年は言う。
「あのバカ２人を簡単に手懐けられると思ったら大間違いだぞ」